

2022 年度「学修行動卒業時比較調査」の実施結果(概要)について

卒業を目前に控えた 2022 年度学士課程 4 年生を対象に実施した学修行動卒業時比較調査は、2023 年 2 月 2 日から 3 月 1 日までを実査期間にして、教学比較 IR コモンズの ALCS 学修行動卒業時比較調査の仕組みを通じて行った。

この仕組みは、本学から電子メールで回答対象者に調査依頼をし、メールに記載した URL または期間中、学生が普段学修成果等の情報アクセスに用いているポータルサイト（スチューデントプラザ）に設置した専用ボタンへのクリックで、回答者の本人認証を経た上で調査専用の ID をコモンズに送信、その後はコモンズの調査ウェブサイト上で回答を行うというものであった。

このウェブ調査の内容は以下に結果を示す通り、在学期間中の学修に関する振り返りを中心とした 39 設問（多肢選択または自由記述）で構成されており、回答はすべて web 上で完結した。回答に対する報酬はなく、授業や学生の集合機会を使った回答実施も行っていない。実査期間中、未回答者に対するメールによる回答の促しは 4 回行った。

調査対象者 434 名に対して回収数 268、回収率 61.7%であった（数値は小数点下 2 位で切り捨て、以下同様）。回収された中に、全設問に無回答のケースが 2 件あった。これらは無効回収とした。回収率に対する有効回収率 99.3%であった。以降は有効回収をもとにした処理結果である。

学科別の回収率は現代家政 52.0%、生活デザイン 64.5%、児童 53.1%、食物 60.8%、人間栄養 73.7 であった。

以下、設問提示順に設問ごとの結果を通覧していく。なお、自由記述の設問については、記載が不可欠と考えられた一部を除き、紙幅の関係からここでは割愛した。なお、割愛分を含めた全部の回答原データは学内 LAN 上のウェブベースで共有されている。

集計結果の特徴

1. 在学中に力を注いできた活動

在学中に力を注いできた活動を 13 項目それぞれについて、「とても熱心に」「熱心に」「ほどほどに」「熱は入らず」「ほとんどしなかった」「しなかった」の 6 選択肢から回答した結果である。両端点の選択肢は概して度数が少なかったことから、両端点の選択肢の結

果は隣接選択肢とまとめてそれぞれの設問の選択度数割合を、「（とても）熱心に」におこなった割合が大きかった順に並べて一覧にしたグラフを図1に示す。

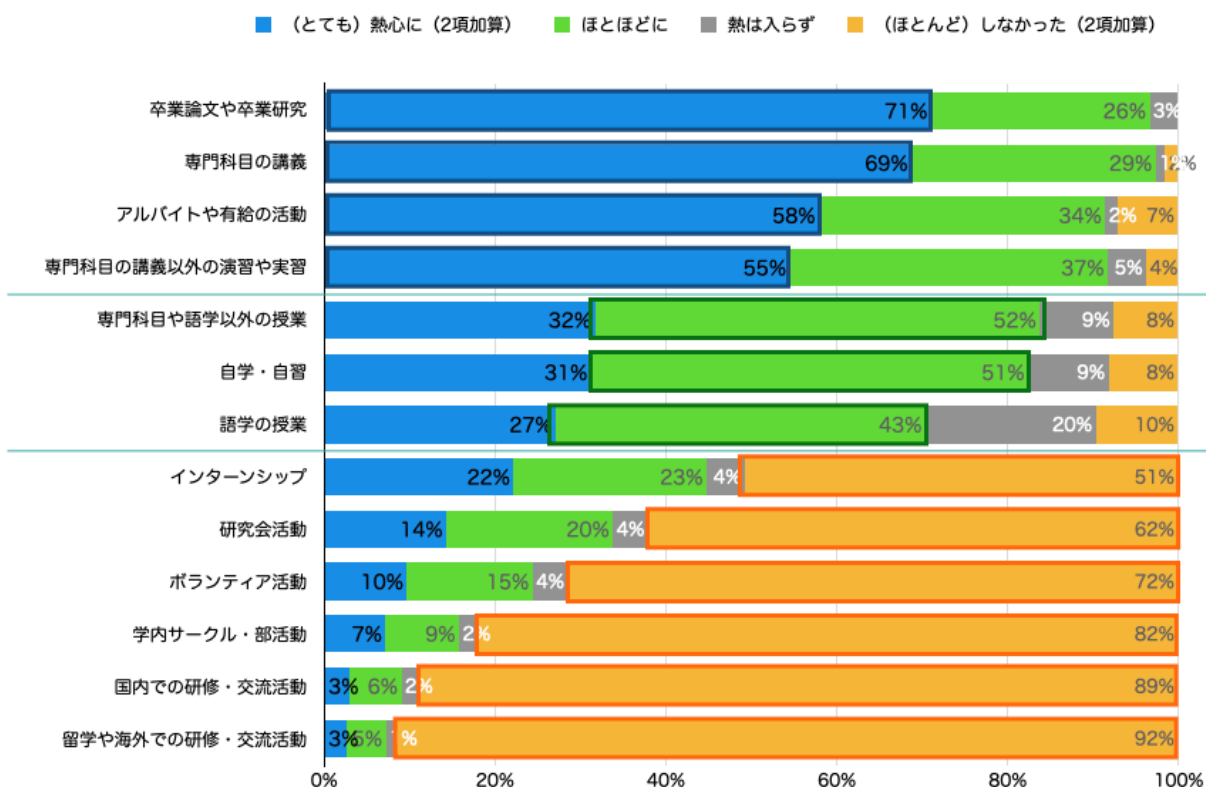


図1 在学中に力を注いできた活動

選択割合の構成から、結果は概ね次の3つに分類できる。

(1) 「（とても）熱心に力を入れたこと」

- ・ 卒業論文や卒業研究
- ・ 専門科目の講義
- ・ アルバイトや有給の活動
- ・ 専門科目の講義以外の演習や実習

大学生の本分である学修、それも高学年次の専門科目の授業を中心に「ほどほどに」を含めれば、100%に近い学生が力を入れて取り組んだ様子が確認できた。別のアンケート調査（学修行動比較調査）の結果からも本学の学生は、他大学よりもアルバイトへの従事時間が長いという特徴が見られ、ここでも同様の傾向は認められたが、その熱心さが他のいずれにも増してというわけではなく、「学業と共に」ということが言える。

(2) 「ほどほどにしたこと」

- ・ 自学・自習
- ・ 語学の授業

本学では知識・徳性・技術を教育理念に掲げ、家政学分野を中心に教育研究を展開している。語学に重心をおいた教育をしているわけではないため、語学の授業への熱心さはその状況を反映した「ほどほど」の回答が多いという結果になった。一方、別途実施した授業評価アンケートの結果では、語学の授業に対する学生からの評価は他の授業に比べて、より高い評価を受けている。

(3) 「（ほとんど）しなかったこと」

- ・ インターンシップ
- ・ 研究会活動
- ・ ボランティア
- ・ 学内サークル・部活動
- ・ 国内での研修・交流活動
- ・ 留学や海外での研修・交流活動

熱心さの程度は低いか、活動そのものをしなかったことがらは、いずれもキャンパス外での活動であった。本学の学生はキャンパスを中心にみれば、どちらかというと内向きで、他大学の学生と積極的に交わり活動するという点には消極的であることが見受けられるが、この卒業時の振り返りでもそのことが確認された。全体的には学内の授業に対応しつつ、活動としてはアルバイトに従事していたと考えられる。回答者である 2022 年度卒業生は 2 年次以降、卒業に至るまでの 3 年間、新型コロナウイルス感染症流行のために、対外的な活動が著しく制約されたという事実があり、その影響がこの結果に直接反映されていることも含めて解釈する必要がある。

2. 授業時間外の学習経験

「授業時間外の学習について、どの程度の経験をしましたか」という問いに対する 8 項目それぞれについて、「かなり経験した」「多めに経験した」「それなりに経験した」「すこしだけ経験した」「経験しなかった」の 5 選択肢から回答した結果である。「かなり」と「多めに」への回答は合算し、4 分類にして、「かなり+多めに」経験した」割合が大きかった順に並べて一覧にしたグラフを図 2 に示す。

「かなり」+「多めに」に、「それなりに」を加え、相対的に経験の多かった項が回答の半数以上を占めた項が 4 項、経験しなかった割合が多くなり、学生により経験の仕方が多様であった項が 2 項、未経験であった学生が明らかに多数であった項が 2 項で、それぞれ次のとおりであった。

「よい友人、教員に会えた経験の多さ」が多くの回答者に確認でき、授業時間外に学習のためのフリースペースや図書館を活かしていた学生も半数以上認められた。「学外での活動」への回答には、ここでも、新型コロナウイルス感染症流行の影響を加味して見る必要がある。

(1) 「（かなり+多め+それなりに）経験したこと」

- ・よい友人に出会えたこと
- ・よい教員に出会えたこと
- ・自主的に学習できる場の活用
- ・図書館の活用

(2) 「経験の多さはそれぞれに多様であったこと」

- ・学外での活動
- ・学術文献の活用

(3) 「ほぼ経験しなかったこと」

- ・語学の自由に使える学習の設備や機会の活用
- ・学内の e-learning コンテンツの活用

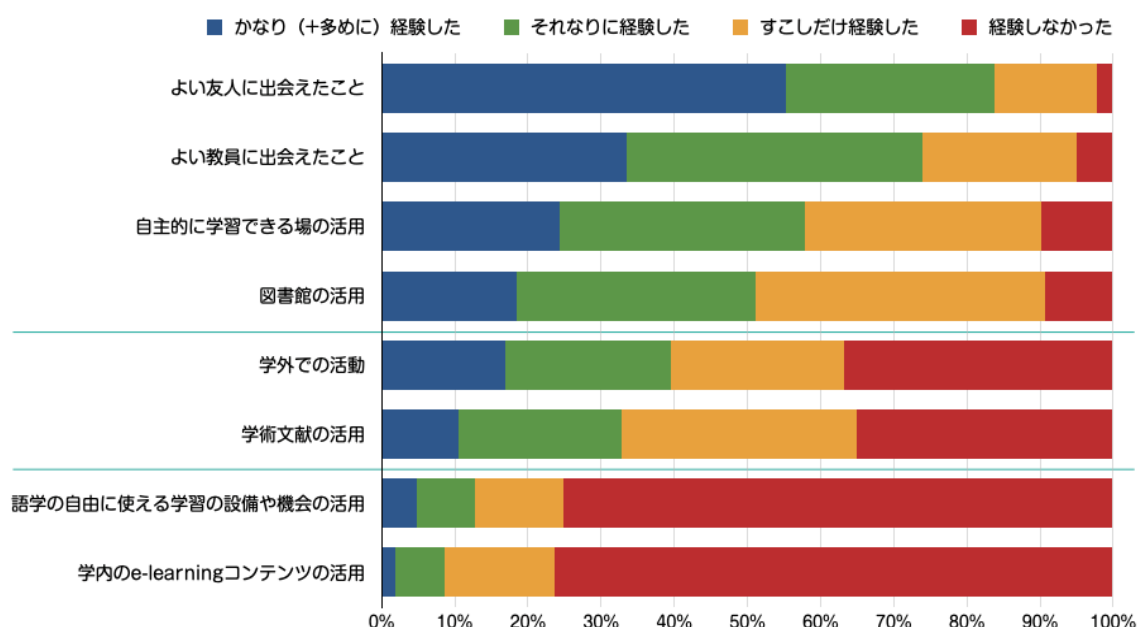


図2 授業時間外の学習経験

3. 卒業論文や卒業研究の内容の適切性と成果

「卒業論文や卒業研究、あるいはそれに準じる活動の内容や成果について自己評価してください」という設問に対する回答結果である。「研究の計画」「研究した内容」「研究の進行」「研究の成果」4項について、「とても適切にできた」「適切にできた」「不十分なところがあった」「不十分であった」の4択から回答した。結果を図3に示す。

(1) 研究の計画と進行

研究の計画と進行はいずれも 8 割方、適切にできたとしている。

(2) 研究した内容の適切性と成果に対する満足度

研究した内容と成果には、計画や進行以上に満足感が表明された。

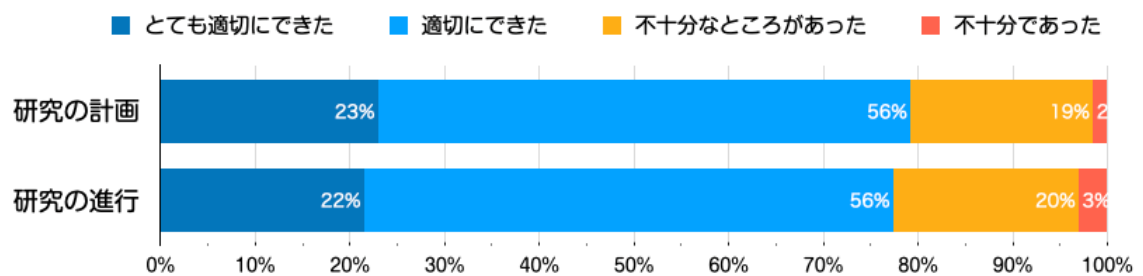


図 3 (a) 卒業論文や卒業研究の計画と進行

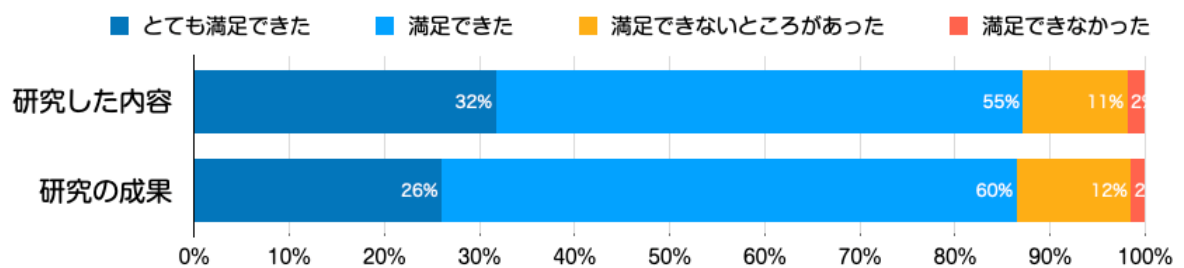


図 3 (b) 卒業論文や卒業研究の内容の適切性と成果

4. 大学生活の総合的な満足度

「大学生活を全体に振り返り、総合的な満足度を表現すると、いかがでしたか。」という設問に対する回答で、「とても満足であった」「満足であった」「満足したとはいきれない」「満足できなかった」の4択から選択した。

卒業する学生の約80%が「大学生活全体を振り返って満足であった」と回答した。全体の20%はその満足度に「とても」を付加していた。一方、「満足できなかった」と回答した学生は2%であった。

■ とても満足であった ■ 満足であった
■ 満足したとはいきれない ■ 満足できなかった
 無回答

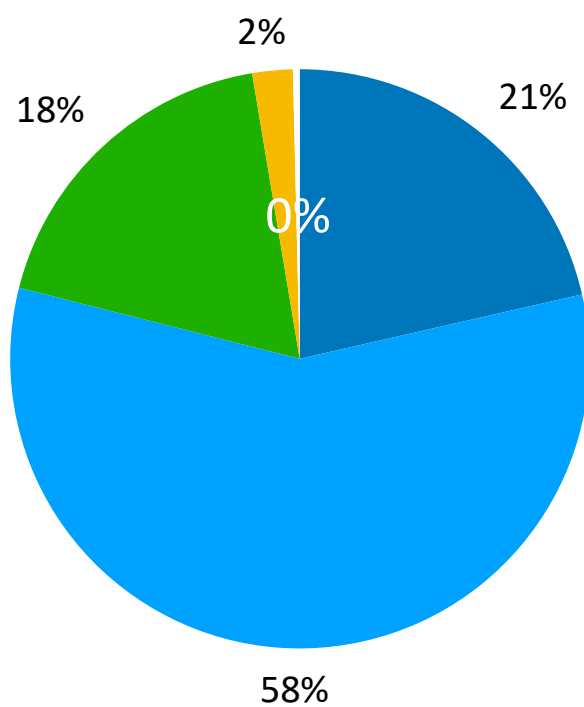


図4 大学生活の総合的な満足度

5. 4年間の成長感

「入学時の自分を振り返ると、今の自分は総合的に、どのくらい成長したと感じますか」という設問に対する回答で、「著しく成長した」「大きく成長した」「成長した」「まあ成長した」「それほど成長しなかった」「成長しなかった」「むしろ退化した」の7択から選択した。

前半3択の「成長した」とした回答は半数以上（65%）を占め、これに、「まあ成長した」の回答を加えると90%を超えていた。

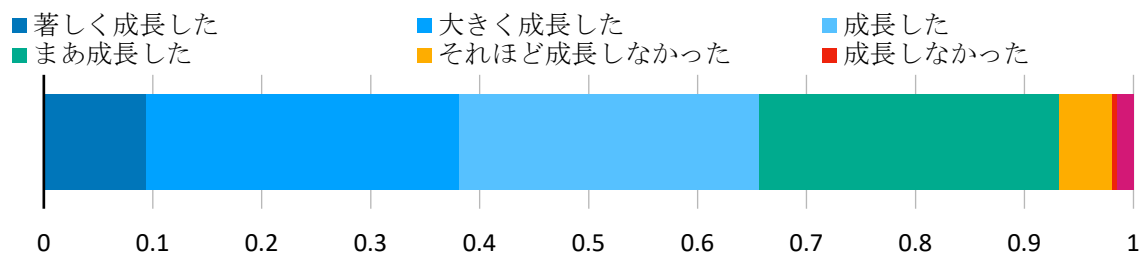


図5 4年間の成長感

6. 4年間の成長に対する質的変容感

「入学時の自分を振り返り比較すると、今の自分は何か「質的に」変わったという感じはしますか」という設問に対する回答で、「大きく変容をした」「変化した」「あまり変化は感じない」「変化は感じない」の4択から選択した。

成長感を何かがよりできるようになったという量的な変化ではなく、新たな自分の発見や、世界観の変容といった質的変容として異なる角度から捉えようとした設問であったが、75%以上の学生が質的变化を感じることができたと回答した。

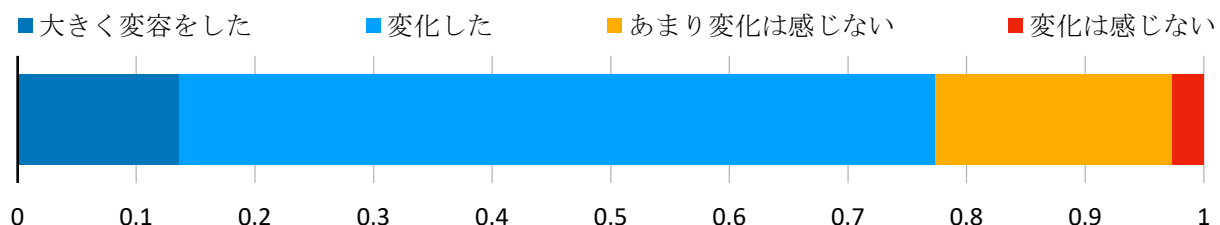


図6 4年間の成長に対する質的変容感

7. 成長感に対する授業の貢献度

「あなたが在学中に学んだこと、身につけたこと、それに基づく成長感を考えるとき、それが『大学の授業によって直接・間接的にもたらされた』と感じられる割合を百分率で表すなら、どの程度になりますか」という設問に対する数値の記入による回答の結果を表1に示す。

全体平均約 70%、学科別にみても 64～74%の範囲であった。

表1 成長感に対する授業の貢献度

全体平均値		69.9%
学 科 別	現代家政	64.4%
	生活デザイン	72.4%
	児童	73.9%
	食物	66.1%
	人間栄養	73.9%

「上記の回答が100%でなかった場合、大学の授業以外から得たと感じるその最も大きな拠りどころとなったことがらは何ですか。コメントも含めて自由に記してください」という設問に対して自由記述での回答を求めた。ここではその回答のすべてを記述されたままの形で記載する(重複回答は整理)。ほとんどの学生が、授業以外では、アルバイトで得た経験が自分を成長させたとしている。前述した通り、本学では他大学よりもアルバイトへの従事時間が長い傾向にあり、それが特徴のひとつになっているが、この回答から、概ねそこでの経験を前向きに吸収して、自身の成長感につなげている様子をうかがい知ることができる。

コメント自由記述（略）

8. 卒後進路についての満足感

「あなたの卒後の進路には、現時点でどの程度満足していますか」という設問に対する回答で、「とても満足」「満足」「やや満足していない」「満足していない」の4択から選択した。

「とても満足」と「満足」を合せて81%であり、8割が卒後進路に満足しているという結果が得られた。

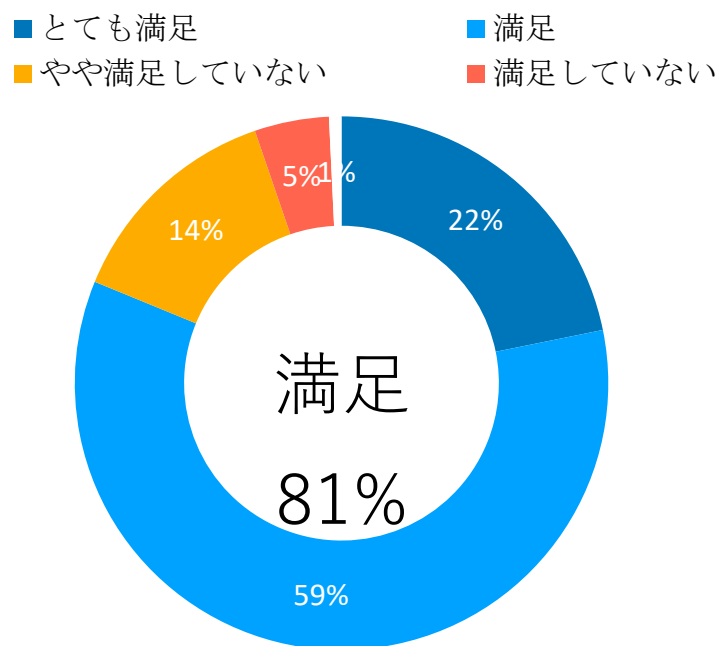


図7 卒後進路についての満足感

9. 卒業に際してのメッセージ

最後に「卒業に際して本学に残したいメッセージがあれば記してください。」という設問に対する自由記述の回答を、これも記述されたままのかたちで回答のあったすべてを記載する。なお、一部に自身の氏名を記した回答があったが、この資料では削除してある。

コメント自由記述（略）